

学期レポート 2013 年春学期

BOSTON
UNIVERSITY

日本財団聴覚障害者海外奨学金事業

第 4 期生 武田 太一



ボストン大学最後の学期

ようやく留学生活最後の学期を迎えた。留学最初の頃はボストン大学に入学するとは想像もしていなかったが、なんだかんだといいながら 3 年間があつという間に過ぎていった。雪国での生活は最初の頃は慣れなかったが、次第に雪かきなども慣れて来るようになった。今年 2 月にはブリザードに見舞われたが、最低限の食料を確保しておくと共に自宅で大人しくしていれば安全だったので無事やり過ごした。4 月にはボストンマラソン爆破事件にも巻き込まれたが、こちらも身に危険が及ぶことなく過ぎていった。いろいろと濃かった学期ではあったが、こうして最後の学期を終えられたことに感謝している。

春学期の講義

この春学期は以下の 2 クラスのみ受講した。いずれも実習に関するものであり、実習に専念するために他の講義は受講していない。実習が本格的になってくると毎日準備に追われていたので、もし他の講義を受けていたら予習なども出来ない状況であった。他の講義を受講していない分、教材作りなどに専念することが出来たが、実際にはもっと時間が欲しかったところである。

DE678 Student Teaching 実習

DE690 Practicum Seminar 実習セミナー

実習の様子

実習先は The Learning Center for the Deaf (聾学習センター) であり、去年秋から小学部のアシスタントとして勤務しているところでもある。担当したクラスもそのまま同じクラスになり、生徒のことをよく知っているのでも事前観察などの必要がなかった。受け持つ生徒は 6 人で、4 年生 4 人、5 年生 2 人の合同クラスとなっている。個々の生徒が聾に加えて他の障害を併せ持っている。自閉症、知的障害、ADHD など様々である。スタッフは教員 2 人、アシスタント 3 人の 5 人で、教員 2 人を置くことでチームティーチング制をとっている。実習担当の先生がこのうちの 1 人であり、担当教科は英語、理科、保健、ソーシャルスキル、フィールドトリップと料理である。

(もう 1 人は算数、社会、朝の会を担当しており、体育、アメリカ手話、図書、美術は別々の先生が担当している。)実習は 12 週間からなり、最初の 2 週間は観察から始まり、3 週間目から少しずつ科目を担当し、5 週間目から実習担当の先生の担当教科を全て、6 週間教えることになっている。

英語 / 英語が第一言語ではない自分が英語を教えるのは気が引ける部分もあるが、重複生徒になると学習機会が損なわれやすいので、日々の生活に必要な英語を教えるように努めた。3 週間おきを目安に新しい単語を 10 個、単語カードを作って家庭での練習、授業中にも iPad やカードゲームなどを織り交ぜて楽しく覚えられるようにした。ある生徒の場合は 10 個覚えるのは大変なので 5 個に減らすなど個々に応じた対応もした。文章を書く練習は写真やイラストを見て、例えば「Tom has the bag. トムはカバンを持っている」などの文が書けるようにした。比較的簡単な文ではあるかもしれないが、例えば誰がカバンを持っているか。トムは何を持っているかなどアレンジが出来るため、アレンジされたイラストを見て文を訂正する練習が出来る。一番苦労したところは読解力ではないかと思う。文章を読んで理解する力に時間をかけて養っている段階なので、出来るだけ長い文章は使わず、3 文ほどの文章を読んで質問に答える力を問うプリントを作ったり、文章が少ない読書プリントを読ませて質問をするなどした。読書プリントは最近では Kindle や iPad などでも読めるようになったが、手話がついていない。そこで手話つきの iBook を作成し生徒に読ませるなど創意にも凝らした。

理科 / マサチューセッツ州の場合は学力テストがほとんどの学年で行われるため、実習中は他の生徒はこのテストのための勉強に必死であった。うちの生徒たちはこの学力テストを受けるために必要な能力が欠けているため、代替措置としてポートフォリオが使われる。このポートフォリオは授業で使ったプリントを集めたものであり、生徒の進捗状況をみることが出来る。自分が実習中のときは理科のポートフォリオがまだ終わっていませんでしたので、これに取り組んだ。1 つの題材に対してプリントを 10 枚集める必要があり、「気温／温度計の読み方」を題材に進めた。このプリントの最後の 3 回は学習到達度が自立性と正解度が共に 80% を超えていなければならない、目標に到達出来るようにプリント製作を順序よく配らなければならない。先生たちは学力テストに合格出来るように必死になるのだが、代替措置のポートフォリオの方も多くのプリントを作る必要がある上に、採点作業やファイル作業などもあるので大変なことに変わりはないと思った。気温については温度計を見て、これは寒い／暖かい／暑いどれか判断出来るようにと教えた。その後は植物や動物のライフサイクルを短い期間ではあったが、創作なども織りまぜて楽しく教えることが出来た。

ソーシャルスキル / 他人と接するときどれくらい距離を置いて会話をするべきか、友達と遊ぶときに順番を守れるか、ルールに従えるかなどソーシャルスキルを教える授業が週に 1 回ある。生徒の中にはまったく教育を受けずに育ってきた子もいるので、このソーシャルスキルが大きく欠けている。ゲームを使ったり、いろんな教材を使ったりと色々な方法で教えた。一回教えただけでは身につかないので、何度も練習を重ねるうちに理解出来るのだがあくまでも教室内で活かされるものであって、教室外では活かされないことがある。そのため、このソーシャルスキルは教室内だけでなく、教室外、例えば体育の時間なども教える必要があるのだが、担任の先生がそこまで介入は出来ないのでアシスタントとのチームワークなどが必要不可欠になってくる。

フィールドトリップ / 学校内だけでなく、地域での体験も授業の一環として教えている。例えばスーパーに行って買い物したり、この買い物でお金の払い方を身につけたり、目的の物を探す練習などをした。自分が担当

する最後のフィールドトリップの際はボストンコモンまで電車で行き、生徒たちにも楽しんでもらえたようで何よりである。

卒業しました

実習も終わり、卒業までの残り課題は修士論文のみとなった。卒業式まで日が迫っている中で、修士論文を何とか形にさせて提出した。卒業後はこれを修正することを条件に、晴れて 2013 年 5 月 18 日に卒業することが出来た。3 年間のボストン大学での生活はあっという間に過ぎていったが、ボストン大学で得た知識と経験は今後の大きな原動力になるであろう。

これからの課題

卒業後は OPT(留学生に与えられる 1 年間のインターン許可)を使って、聾学校で 7 月まで働く予定であり、その後は未定である。このままアメリカにしばらく留まるか、日本に戻るかなどいろんな選択肢を迫られているが、どんな道であれ今まで培ってきた基盤があるからこそ乗り越えられると思う。やりたいことがたくさんある中で、自分の可能性を広げるためにももっといろんな挑戦をしていきたい。